

東北大、高度教養教育フォーラムを開催 入試政策を問う・教育行政と教育現場の対話

第36回東北大学高等教育フォーラム「大学入試政策を問う―教育行政と教育現場の「対話」―」が、去る5月18日に東北大百周年記念会館川内萩ホールを会場として開催された。

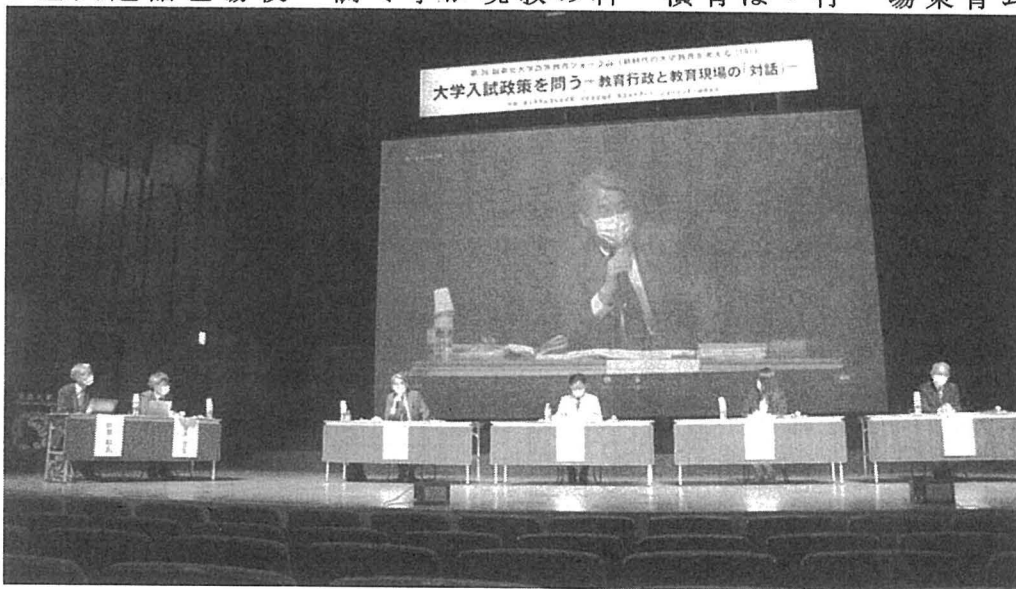
同フォーラムは例年、春と秋の年2回行っており、春のフォーラムでは高大接続・入試関連の企画を実施している。今回は「大学入試政策を問う―教育行政と教育現場の「対話」―」をテーマとして、講演とともに、活発な議論が展開された。

フォーラムでは、大野英男総長と文部科学省高等教育局大学振興課大学入試室の平野博紀室長の挨拶による開会後、国立教育政策研究所の浅田和伸所長が「教育の現場と政策と研究と―やはり「教育は現場が命」だ―」、東北大の倉元直樹教授が「大学入試のコンプライアンス―未履修 入試ミス、そして、コロナ対策―」と題して基調講演を行った。

続いて、山形県立東桜学園中学校・高校の延沢恵理子教諭が「地方公立高校の現場から」、東京都立八王子東高校の宮本久也校長が「入試をめぐる行政と現場との対話―高校入試と大学入試を比較して―」と題して現状報告。さらに報告後には、東北大の宮本教授と阿部特任教授による司会進行で、教育行政と教育現場間の対話が行われていく。また今後このように行われていくべきか」といった各種討論が行われた。

最後に、滝澤博胤理事が「教育者が100人いれば100の意見があり、その中から最適解を見つけるため、私たちはさまざまな知識やデータ、経験等をポケットにしつかり詰め込んでおく必要がある。大学入試が高みを目指すためにも高校・大学・行政の三者でしっかりと土台を整備していきたい」と発言し、フォーラムを締めくくった。

今回は「来場参加」と「オンライン参加」に



「来場参加」と「オンライン参加」によるハイブリッド方式で541名が参加したフォーラム

よるハイブリッド方式での開催となったが、過去最高となる541名が参加し、関心の高さをうかがわせた。

また、今回のフォーラムは高校・大学間の接続関係の改善や入学者選抜等の業務改善に関する研究協議等を行う「国立大学アドミッションセンター連絡会議」の共催として実施された。さらにフォーラム終了後には、同連絡会議に加盟する37機関が参加し、第20回総会が開催された。